

今、この人に Interview

環境型社会創造研究所えこら 事務局 藤田アニコーさん

リサイクルを通して自然を守る仕組みをつくり、
自分ができることで環境保全に貢献していきたい。



■日本に興味を持ったきっかけは？

13歳のとき、友達に誘われて極真空手を始めました。空手の深いところを学ぼうと武士道なども触れるようになったことから、日本に興味を持つようになりました。大学では経済学を専攻しましたが、2000年には地元で唯一の日本人から日本語も習い始めたんです。また卒業論文でも、日本のマーケティングについて研究しました。

■環境問題には、ハンガリーにおられた頃から興味があったのですか？

私の父は節電や雨水の再利用など、環境にやさしい生活を実践していて、私もその習慣が身に付いていました。でも大学で環境問題を勉強するようになると、問題が大き過ぎて自分が何をしたいか分からなくなってしまいました。そんなときNPO法人ネットワーク地球村の代表と出会い、小さいことをコツコツやるのが大事だと教えられて、自分にも出来ることがある、と分かったんです。

■就職を機に滋賀県に来られたそうですが、それまで住んでいた大阪と滋賀で土地柄の違いは感じましたか？

全然違いますね。例えばゴミの分



▲淡海ネットワークセンターで開催された「1・23フォーラム」で、資源物を集めて環境保全につなげる「えこら」の寄付イベント企画について発表する藤田アニコーさん。

別など、大阪より滋賀の方が進んでいると思いました。就職したのは草津市にある「近畿環境保全」という廃棄物処理の会社です。大阪では環境問題について話しても反応が鈍かったのですが、滋賀の企業の方は琵琶湖を愛していて、環境保全にも熱心に取り組んでいます。そんなこともあって、私の話を理解してくれる人が多いですし、環境活動に取り組む人たちとのつながりもたくさん作ることができました。

■日本人の方と国際結婚されていますが、文化のギャップで悩むことはありますか？

夫とは空手の道場で知り合いました。二人とも自然が好きで、環境問題に興味があって、夫は自分は社会のために何が出来るかを考えた末、滋賀で低農薬の農業を始めたんです。お互いの文化を理解し合っ、今は悩みがありませんが、子どもができたら変わってくるかもしれません。それはそれで楽しみです。

■昨年7月に「循環型社会創造研究所えこら」という団体を立ち上げられました。どんな活動をしているのですか？

個人や企業のみなさんに、缶やペットボトル、古紙、廃食油などの資源物を集めてもらうんです。それを「えこら」からリサイクル会社に売却し、収益金の一部を琵琶湖の環境保全のための滋賀県の「マザーレイク滋賀応援寄附」に寄付する、という活動です。市民のみなさんが、要らないもので環境保全に貢献できる仕組みを作り、今までごみとして捨てられた資源物に対する価値観を変えていくことを目指しています。

■「えこら」の活動はどのように伸ばしていきたいですか。

今まで実際に集まった寄付は1万

▲日本が大好きで「日本は運命だと思っていた」という藤田アニコーさん。24歳の時「自分の専門の勉強も続けられ、長い間日本にいられる」と交換留学制度を利用して来日を果たした。

●プロフィール●

ハンガリー出身。13歳のとき極真空手を習い始めたことをきっかけに日本に興味を持つ。大学では経済学を専攻し、日本のマーケティングについて研究する。24歳で来日し、関西外国語大学、大阪大学大学院で学ぶ。その間に環境問題に取り組む団体の人々と出会い、自身も環境活動に取り組みたいと思うようになる。2009年に草津市の廃棄物処理会社に就職。循環型社会創造研究所「えこら」を立ち上げ、公私ともに環境を考える活動に没頭している。2009年に結婚。趣味は武術とハイキング。栗東市在住。

円ほどですが、お金を一切出さず、要らないもので集まったお金なので、皆さんの協力はすごいなあと思います。今後は応援メンバーを増やすとともに、仕組み的にも改善していきたいですね。社会で資源を大事にすることが目的なので、リサイクルに加えて、環境学習や自然を身近にする体験学習などにも力を入れていこうと考えています。

■異文化の目から見て今、日本人に伝えたいことはありますか？

日本の文化で印象的なのは、武道や茶道などの「道」です。例えば武士道の考え方には、戦おうとしている相手のことを思いやるということがあります。それは「戦わず勝つ」、つまり相手と衝突せず、調和するという意味です。「道」は「型」を身につけることを通して心を成長させ、極めていくものなんですね。また日本では、消費者は次々に新しいものを買う生活に慣れてるように思いますが、昔はそうではなく、ものを大事にして、循環型のシステムを作り上げていました。それがどんどん失われていくのは寂しいなあと思います。こうした文化を捨ててしまわないで、大切にしたいですね。